

侵襲例の診断, 手術手技の問題点について検討したい。

**質問**

(至誠会) 佐藤イクト

気管輪切除3.5cm というが, 切除端々縫合だけで心配ないか, 何か人工的なものを用いないか, 何 cm まで切除可能ですか。

**応答**

演者 (内分泌外科) 遠山 千秋

気管輪は長さにして3.5cm, 気管輪にして7輪までは環状切除後, 端々吻合により充分安全に手術することが可能です。

**9. ハトムギ寒天及び液体培地を用いての真菌培養成績について**

(第二病院皮膚科) 清水 弘美

現在までに我々の教室では, ハトムギのウイルス性疣贅に対する臨床的実験的研究を行なつてきており, その基礎実験として, ハトムギ果皮と種皮から抽出した熱水抽出エキスには, 末梢血リンパ球, 及び, T cell growth factor で growth させた T cell 等の細胞に対して, 細胞障害活性があることを証明した。尚同エキスの抗細菌, 抗真菌作用について検索した結果, 細菌16株, 真菌3株に対し, このエキスは抗菌活性を示さなかつた。

以上のことから, 今回, 我々は, 真菌の培地としてハトムギ各部分の熱水抽出エキスをつくり各種実験を行なつた。その結果, これを培地として応用できることがわかり, かつ, 従来のサブローブドウ糖培地と比較して, 若干の相異があることをみつけた。すなわち, ハトムギを, ヨクイニン, 果皮と種皮, 種皮の3種にわけて各々の熱水抽出エキスを作製する。これを用いて, 液体培地, 寒天平板培地をつくり, まず, 寒天平板培地に, *Sporothrix schenckii* Fonsecaea pedrosoi, *Trichophyton mentagrophytes*, *Epidermophyton floccosum* の4種をうえた結果, 前2者では, その発育がサブロー培地に比べ同等であったが, 後2者では遅延していた。また *Sporothrix Schenckii* では黒色の, *Trichophyton rubrum* では褐紅色の色素産生をみた。次に, これらエキスの液体培地とサブローブドウ糖液体培地との発育状態を半定量的に比較検討した。まず, *Trichophyton rubrum* を試験管内で発育させ, 管底からの菌塊の高さを測定した結果, 種皮エキスの方が真菌の増殖に適していることがわかった。次に, *Microsporum gypseum* を用いて試験管内の真菌の重量を測定した結果, サブロー培地に比較して, これらの熱水抽出エキスを用いた培地はすべてサブロー培地よりも増殖に適していることがわかった。

**質問**

(微生物) 岩田 和夫

培地の化学組成を明らかに, また pH 値等の因子について各真菌種の発育を Sabouraud 培地との比較において検討することが望ましい。

**応答**

演者 (第二病院皮膚科) 清水 弘美

ハトムギを使用する培地の生化学的分析は現在検索中であり, サブロー培地と比較するには先生のおつしやる通り, 糖や蛋白, pH などを一定にして測定しなければいけないと考えております。

**10. 両側乳癌症例に関する検討**

(第二病院外科)

○飯田 富雄・芳賀 陽子・川田 裕一・  
芳賀 駿介・菊池 友允・小川 健治・  
梶原 哲郎・榊原 宣

われわれの教室の過去10年間の乳癌根治手術症例は196例あり, 同時性3例, 異時性1例の4例(2%)が両側性乳癌であつた。同時性の発生年齢は, 70歳代, 50歳代, 30歳代それぞれ1例ずつであり, 異時性の発生年齢は, 30歳代であつた。同時性3例の初診時の主訴は1例のみであり, 両側乳腺X線撮影にて対側の異常が指摘された。異時性1例は, 第1癌の根治術後外来にて免疫化学療法にて経過観察中, 4年目に第2癌の発生をみた。病理組織像をみると, 同時性では, 髓様腺管癌と左右同じ組織像をもつたもの1例あり, 他の2例は左右それぞれ髓様腺管癌と硬癌, 乳頭腺管癌と硬癌と全く異なつていた。また異時性の病理組織像は, 左右とも髓様腺管癌と同じであつた。根治手術後1カ月から3年5カ月経過し, 4例とも現在までは局所再発, 遠隔転移もみられず経過良好である。

**11. マイコトキシンとマイコトキシン中毒症**

(微生物) 岩田 和夫

マイコトキシンは真菌毒素とも呼び, カビ(真菌類)の産生する毒素もしくは毒性物質でいわゆる真菌有毒二次代謝物質である。それによるヒトあるいは家畜, 家禽に対する諸種中毒症をマイコトキシン中毒症(真菌毒素中毒症)と呼ぶ。

マイコトキシン, マイコトキシン中毒症は, とくに発癌性, 変異原性との関連において, 従来主として獣医学領域で取扱われ, 医学領域では食品衛生の立場から研究が進められてきた。大部分のマイコトキシンは低分子物質であり, 非病原性真菌から産生されるが, 近年演者らにより病原真菌から高分子マイコトキシンが見出され, 真菌症の発症機序に重要な役割を演ずることが証明されたが, これは最近の新しい概念として